

スキャンディナヴィアから見たバルト海南岸

—紀元千年前後—

小 澤 実

はじめに

- I 「カトリック世界システム」という仮説
- II 紀元千年前後のバルト海南部をめぐる研究
- III 政治構造の局面へ

はじめに

北海とバルト海という海洋に挟まれたスキャンディナヴィア世界は、その地理的位置ゆえに時代をつうじて異文化集団との接触を繰り返し、独特の歴史世界を創りあげてきた。接触の対象は、それぞれ固有の歴史展開を見せる西方のブリテン諸島、南方の大陸、東方のスラヴ世界の諸集団であり、彼らとの間に政治、経済、宗教、文化といったさまざまなレベルでの関係を築きあげてきたのである。本稿では、スキャンディナヴィア世界（とりわけデンマーク）とスラヴ世界、なかでもバルト海南岸部に割拠するエルベ・スラヴ人との関係に論点を絞って近年の研究を整理し、今後とるべきアプローチ方法を提示したい。なお対象時期である紀元千年前後における問題系をより鮮明に浮き彫りにするために、第I章ではスキャンディナヴィア・バルト海南岸部関係史において従来検討の中心を占めていた12世紀以降の研究現状を簡単に紹介しておきたい。

I 「カトリック世界システム」という仮説

1990年頃まで、スキャンディナヴィア世界とバルト海南岸部の関係を論じる研究潮流の中心となっていたのは、政治史ならびに教会史の分野におけるヴェンド十字軍研究と経済史の分野におけるハンザ研究である。しかしながら東ヨーロッパにおける共産圏の解体とEUの拡大を背景にこうした研究の方向性は大きく変化したように思われる。

ヴェンド十字軍研究から見ていきたい。ヴェンド

十字軍とは、王権の主導によるバルト海沿岸に割拠する非キリスト教集団の改宗活動であり、直接的には第2回十字軍の開始にあたって聖ベルナルが提唱した「北方の異教徒」の改宗要請に端を発する¹⁾。デンマーク王権と教会の連携により推進された当該活動は、その後のヴァルデマー2世によるエストニアへの領土拡大へとつながることもあって、中世デンマーク政治史にとって重要なテーマであったはずである²⁾。しかしながら、このようなスキャンディナヴィア人による十字軍運動の研究はデンマークにおいては必ずしも盛んであったということはず、E・クリスチャンセンによる包括的な概説書(1980)によってようやくその全体が把握できるようになったに過ぎない³⁾。停滞気味であったヴェンド十字軍をめぐる研究は、デンマーク国家人文研究会議が1998年から2001年までの4年間、「デンマークと十字軍運動」という研究プロジェクトに資金援助を与えたことにより大きく転換する⁴⁾。K・ヴィラズ・イェンセンを中心とする四人の研究員によって推進されたこのプロジェクトは、専門誌上での十字軍特集にはじまる多くの成果を生み出し⁵⁾、最終的には『デンマークの十字軍』というハンドブックへと結実した⁶⁾。一連の研究に通底する、従来の研究姿勢とは明らかに異なる二つの特徴を述べておこう。一つはデンマークによる十字軍運動を、特殊デンマーク的な歴史事象にとどめることなく、ヨーロッパ全体における十字軍運動の潮流に位置づけようとしている点である。このような視点は、中世デンマーク史を同時代のバルト海海域史やヨーロッパ史の中に置きなおす作業も意味しており、当該プロジェクトのメンバーは他国の研究者と協力して、リーズ国際中世研究集会においてヴェンド十字軍を中心とするセッションを設けた。その成果は『バル

ト海フロンティアにおける十字軍と改宗』(2001)という論集となり、クリスチャンセン以降のバルト海十字軍研究の新たな里程標となっている⁷⁾。もう一つの特徴は、ヴェンド十字軍を初期中世から14世紀に至るバルト海の改宗活動という長期プロセスの中で理解する視点の導入である。ヴェンド十字軍をはじめとするバルト海沿岸の改宗活動の担い手となったスカンディナヴィア諸国がローマ・カトリック世界へと参入したのは10世紀以降のことであり、スカンディナヴィア諸国の改宗もバルト海十字軍も北方世界のキリスト教への改宗という視点に立てば同一線上に並ぶ⁸⁾。このような研究視点にとってひとつの画期となったのは、M・ミュラー・ヴィッレが編纂した『北欧におけるローマとビザンツ』(1997-98)であり、収録論文ではバルト海沿岸の各地域における改宗活動の過程が詳細に論じられている⁹⁾。

他方、ハンザ研究も大きな転回点を迎えている。バルト海南岸部は、伝統的なハンザ史の区分に従えば「ヴェンド都市」が点列する地域であり、当該地域のハンザ商業における役割はとりわけドイツ史家とポーランド史家によって論じられてきた¹⁰⁾。都市連合体であるハンザの存在は、スカンディナヴィア諸国、とりわけデンマークとスウェーデンにとってもその国家政策を左右するほどの重みを持っていたが、その研究は本質的に経済史の分野に属していた。しかしながら、その出発点としてはハンザ研究を継承するものではあるが、テーマにおいてより包括的である「CCCプロジェクト」による成果が、スカンディナヴィアにおける研究姿勢を変えつつある。「CCC」とは「文化、衝突か妥結か Culture Clash or Compromise?」の略であり、その出発点は1996年に開催された第11回ヴィスビー会議に遡る¹¹⁾。スウェーデン銀行の「三千年紀基金 Trecentenary Foundation」の援助を受けたこのプロジェクトは、バルト海沿岸諸国の多数の研究者が頻繁に研究集会を開き、経済局面にとどまることなく、政治文化や共属意識といった側面にまで踏み込んだ大胆な企画である¹²⁾。この企画を統括するのが2006年現在ゴットランド大学に籍を置くN・ブロムクヴィストである。彼は「CCCプロジェクト」において発表さ

れた個別研究を踏まえながら、近年公刊された大著において、ブローデルによる歴史の三層構造とウォーラステインの世界システム論に触発された「カトリック世界システム論」を展開した¹³⁾。12世紀以降ローマ・カトリック世界に組み込まれたバルト海世界においては、かつては内陸部に位置していた中心地が海縁部へと移行し、リュエベック、ヴィスビー、リガをひとつの軸とするネットワークが成立することで、それ以前の時代とは全く異なる経済分節構造へと転換した、とする仮説である。この仮説の当否はさまざまな地域の研究者による検証を待たねばならないが、中世後半においてゴットランド島が北ヨーロッパにおけるひとつの結節点であったことは疑いようもなく、またJ・アブー・ルゴドによる『ヨーロッパ覇権以前』で論じられるユーラシア・システムとの接合も期待される魅力的な仮説ではある¹⁴⁾。

さて、以上二つの研究姿勢には共通点がある。それは、スカンディナヴィア世界の「ヨーロッパ化」現象に収斂していることである。もちろん「ヨーロッパ化」という曖昧な述語を一義的に理解することは困難であり、「CCCプロジェクト」の刊行物において実証されるように、政治・宗教・経済・文化の各局面において解釈に幅があることは銘記しておかねばならない。とはいえ、結局のところ「辺境」であるスカンディナヴィア世界が、ヨーロッパ中核部で個性化された「キリスト教世界」の生み出す制度とイデオロギーを条件付とはいえ受け入れることにより、当該世界の一員として各地域の歴史展開を進めるという点では一致を見ている。

II 紀元千年前後のバルト海南部をめぐる研究

以上述べてきたように、スカンディナヴィア世界とバルト海南岸部との関係を考えるにあたって十字軍とハンザが二つの大きな柱であることは間違いのない。とはいえ、いずれの歴史事象も12世紀以降に属しており、それ以前の時代における両地域の関係史を直接証言するものではない。しかしながら、まさに紀元千年を挟んだ10世紀から11世紀にかけての時代こそが、両地域の歴史にとっては決定的な意味を

持つ。というのも、オットー朝ドイツの勃興を背景としながらスカンディナヴィア世界とスラヴ世界に中世国家の祖型が成立することにより、バルト海沿岸に新しい政治秩序が現出するのが、この時代にあたるからである。

しかしながら、北歐ではヴァイキング時代と呼称される11世紀以前の時代において、スカンディナヴィアとバルト海南岸部、つまりオボドリートやヴィルツィと呼ばれるスラヴ系諸族が割拠し、草創期のポーランド・ピアスト朝がその勢力を伸ばしつつあった地域との関係を扱った研究は、極めて少ない。実はデンマークにおいては1900年という極めて早い段階で、J・ステーンストロップによる文献史料に基づいたデンマーク・スラヴ関係史が公刊されているが、それ以降の研究で活用はおろか言及されることすら少なく、実質的に当該研究分野は1世紀近く休眠状態であった¹⁵⁾。もちろんスカンディナヴィア人によるバルト海交易への参加とその重要性は、ピレンヌ・テーゼへの大胆な批判を展開したS・ボリーヌ以来認識されているが、それは原則としてスカンディナヴィア世界（とりわけスウェーデンのビルカ）と東スラヴ世界、つまりルーシとの関係を論じたものであり、バルト海南岸部に焦点を絞っているわけではない¹⁶⁾。ヴァイキング時代スカンディナヴィアに対してバルト海南岸部が有する重要性が認識されるようになったのは、第二次大戦後、旧東ドイツやポーランドに属する当該地域において定住地や交易地の発掘が進み、そこにスカンディナヴィアとの関係を示す遺物が発見され、そのデータが体系的に利用できるようになってからである¹⁷⁾。このような中世考古学の成果の里程標となるのは、別個に開催されたシンポジウムを基にドイツで1987年と1988年に公刊された大部のシンポジウム報告集であり、とりわけW・フィリポヴィアクやJ・ザクのようなポーランドの専門家も参加している後者は両地域の交易を考える際の基本文献となっている¹⁸⁾。

しかしながら近年、以上のような研究状況とは方向を異とする三つの研究が公刊された。いずれも第二次大戦後の中世考古学による成果の恩恵を十分に受けているが、これまでの研究史において中心を占

めていた交易活動にのみ力点を置くものではないという点で一致している。スカンディナヴィア世界との関係という観点から、順次紹介したい。

一冊目は、市原宏一の学位論文である『中世前期北西スラヴ人の定住と社会』（2005）である¹⁹⁾。著者がこれまでに発表した専門論文を加筆修正の上まとめた本書は、エルベ川とオーダー川に挟まれた地域に割拠し、固有宗教を奉じる12世紀以前の北西スラヴ人集団（オボドリート人、ヴィルツィ＝リュティッチ人、ポンメルン人）を対象とし（ただし第四章のみは東方植民期を扱う）、彼らによって生み出される地域的なまとまりのもつ社会構造を明らかにすることを目的としている。その際、社会の形成要因として従来のように北西スラヴ人の内在的要素を重視するのみならず、彼らを囲繞するバルト海沿岸の諸国家・諸民族との交流によって与えられた外在的要素もまた考慮するという点が強調されている。

北西スラヴ人の社会形成過程における外在的要素の考察は、特に新しい視点というわけではない。市原も第一章で論じるように、とりわけドイツとの関係に関しては、第二次大戦後の東西ドイツ学界において相当の蓄積を見ていた。W・シュレージンガー、H・ルダート、W・フリッツェらによる個別研究は両地域間の政治上の関係を明らかとし²⁰⁾、彼らの問題意識を継承したC・リュプケは、10世紀から11世紀にかけての文献史料とドイツならびに東欧学界の研究史を悉皆調査することで、記念碑的な『エルベ・オーダー間スラヴ人の事績要録』（1984-88）を完成させた²¹⁾。しかしながら、彼ら歴史家による研究が依拠するのはあくまでも文献史料であるという制限があり、経済構造そしてそれと密接に関連する社会構造を再現するためには、中世考古学による成果が必要となることは言を待たない²²⁾。市原は、現在のドイツ北東部からポーランド北西部にあたる北西スラヴ人の居住地域で発掘された定住地と交易地（たとえばグロス・シュトレームケンドルフ、ラルスヴィーク、メンツリン、ヴォリン等）に関する研究に加え、スカンディナヴィアにおける発掘報告も利用しながら、北西スラヴ人の集団形成をドイツとの関係のみならず、スカンディナヴィア、とりわけデンマークとの関係の中での理解を試みる。

本書においては必ずしも体系的な分析がなされているわけではないが、北西スラヴ人の社会形成過程にデンマークの存在という要素を指摘したことは、本稿の関心に照らし合わせるならば重要である²³⁾。スカンディナヴィア諸国においても、スカンディナヴィア南部とスラヴ世界との交流を示す遺構の発掘は近年ようやく注目を浴びるようになってきており、今後の成果が期待される²⁴⁾。

二冊目は、スウェーデンの考古学者 M・ロスルンドによる学位論文『家内の客人—900年から1300年にかけてのスラヴ・スカンディナヴィア間の文化変容—』(2001)である²⁵⁾。ロスルンドは、これまで中世におけるスラヴ人とスカンディナヴィア人の交流を包括的に扱った研究がなかったことを指摘し、考古学資料を用いることで両者の相互交流過程、とりわけスカンディナヴィア世界を訪れたスラヴ人の存在とその意義について論じる²⁶⁾。彼は、従来文化人類学や歴史学においては盛んに議論されてきたにもかかわらず、中世考古学では及び腰であったエスニシティをめぐる理論を利用し、南スカンディナヴィアからウップランドにかけての地域で発見された日常生活用品である陶器を分析の俎上にのせた²⁷⁾。彼によれば、一見同種に見える陶器も、その文様と構成成分によって後期スラヴ様式、いわゆるバルト様式、スカンディナヴィア起源の混交様式という三つの様式に分類可能であり、デンマーク東部、ゴットランド島、シグトゥーナを中心とするウップランド、そのほかのスウェーデン地域という4つのセクターに分けられた対象地域で、それらの様式がどの程度の割合で残存しているかを計測することにより、スカンディナヴィア社会におけるスラヴ人の浸透の度合いとその地域差を解明することができる、という。地域によって差異はあれスカンディナヴィアの都市社会や農村社会に定住するスラヴ人の存在は叙述史料によって知ることが困難な情報であり、それを立証した本書の成果は注目に値する。

三冊目は、1997年に開催されたシンポジウムの報告集である『レリックとボーンヘーフェズとの間—9世紀から13世紀に至るデーン人と隣接スラヴ人の関係—』(2001)である²⁸⁾。14本の論考からなる本書では、808年のデーン人によるレリック攻撃

から1227年のボーンヘーフェズの戦いまでのデンマークとスラヴ諸部族との接触過程が、さまざまな分野の研究者によって論じられる。考古学者の T・ケンブケと歴史学者である C・リュブケと P・ノイマイスターの三者が、7世紀から13世紀にいたるまでの両者の関係をクロノロジカルに跡づける総論を担当し、残りの論者がデンマークに残るスラヴ人の痕跡、また逆にバルト海南岸に対するデンマークの影響をそれぞれの分野の知見を用いて論じる。13世紀デンマークの歴史家サクソ・グラマティクスの記述によりながら両者の関係を論じる章もあるが、ほとんどの研究は考古学、地名学、建築史学等の歴史学の隣接分野の知見を利用しており、当該分野の研究の困難さと同時に今後の研究の一つの方向性も感じさせる。一つ指摘しておきたいのは、複数の論文がユラン半島からスコーネにかけてのデンマーク中核地ではなく、ランゲラン島、ロラン島、ファルスター島、ムン島、ボルンホルム島というデンマーク影響圏とスラヴ影響圏の狭間に位置する島嶼におけるスラヴ人の痕跡を論じている点である²⁹⁾。同様の事例はノルウェー系スカンディナヴィア人とケルト系諸集団が混交するスコットランド北部からアイリッシュ海にかけての島嶼においても観察されるが、それは両者の関係を具体化させる際に「島嶼にして境域」という空間の持つ意味を考慮する必要をわれわれに喚起する³⁰⁾。

以上、近年公刊された三つの研究では、11世紀以前の段階でスカンディナヴィア世界とスラヴ世界との間には、文献史料には表れないレヴェルでの相互交流があったことが実証されている。それも交易による物品の交換にとどまることなくお互いの領域内に定住することで、本来的には異なる文化に属するスカンディナヴィア系住民とスラヴ系住民が共住する生活空間を現出させていたという事実は、バルト海南部という歴史空間を考える上で重要な前提となるだろう。キール湾からフェマーン海峡を経てバルト海へとつながる水路は、言語や生活慣習の異なる二つの世界を隔てているわけではないのである。

III 政治構造の局面へ

以上述べてきたように考古学を中心とした近年の

研究は、デンマークを中心とする11世紀以前のスカンディナヴィア世界南部とバルト海南岸部の間に存在した両者の混交状況を明らかにしつつある。しかしながらⅡ章で紹介してきた諸研究は、原則として当該地域の社会経済史もしくは定住史的側面に光を当てたものであり、言ってみれば文献史料に記録されることのない「無名の人びと」の接触状態を再現したものと言うこともできよう。それでは「名ある人びと」つまり文献資料に名を残す政治上の有力者たちの動向に関する研究現状はどうなっているのだろうか。

前述したステーンストロップの小著以来、スカンディナヴィア史の側からポーランドを含めたバルト海南岸部に割拠する諸集団との政治上の関係を論じた研究は、ほとんど存在していない。デンマークにおいては例外的な研究としてS・エレホイによる「オーラヴ・トリュグヴァソンの死とヴェンド人」という重要な論文があるほかは³¹⁾、T・ダムゴーア・セアンセンが1991年にデンマーク人のスラヴ人に対する態度に関する論文を公表し³²⁾、N・ロンが『ハーラル青歯王の死』(1998)という小著のなかでスラヴ人の役割への注意を喚起したに過ぎない³³⁾。近年目を引くのは、ウップサーラ大学で博士号を取得したポーランド出身の考古学者W・ドゥチュコによる一連の研究であり、積極的にスウェーデンとポーランドの政治上の関係を論じている³⁴⁾。ただし彼の文献史料からの情報摂取は史料批判という観点からはやや安易であり、注意を要する³⁵⁾。他方ポーランド史学においては、デンマーク王スヴェンが建国期のポーランド公ボレスワフ・フロブリの姉妹と結婚したという事実があるため、G・ラブダをはじめとする中世史家による研究が一定程度蓄積されている³⁶⁾。とはいえ、近年の初期ピラスト朝研究を見る限り、このデンマーク・イエリング王朝との婚姻は一回的な事件として扱われているようであり、当該地域の政治構造にまで深く立ち入って分析している形跡はない³⁷⁾。つまり、経済構造や社会構造においては深いつながりを見せるスカンディナヴィア南部とバルト海南岸部という地域は、政治構造という観点においてはまだ研究対象として確立してはいないのである³⁸⁾。もちろん、そこに意味のあ

る政治構造が存在しないということであれば、あえて分析の俎上にのせる必要もない。しかしながら次に述べる歴史的事実を前にして、われわれはどのように考えるべきであろうか。

10世紀初頭のユラン半島に成立したイエリング王権は、ゴーム老王、ハーラル青歯王、スヴェン叉髭王、クヌーズ(クヌート)大王、ハーデクヌーズと継嗣し、その後ノルウェー王であったマグヌス善王を挟んで、クヌーズの娘婿スヴェン・エストリズセンが新王朝を確立する。さて、この時期のデンマーク王権の婚姻に注目してみよう。ユラン半島南部セナー・ヴィシンに立つルーン石碑によれば、ハーラル青歯王の妻はオボドリート族の首魁プリヴィスラウの娘トーヴェであったことがわかる³⁹⁾。また、11世紀後半に『ハンブルク司教事績録』をまとめたブレメン聖堂参事会員アダムによれば、両者の息子であるスヴェン叉髭王の妻はすでに述べたようにポーランド公の姉妹であり⁴⁰⁾、またスヴェン・エストリズセンの娘シグリーズはオボドリート侯ゴットシャルクの妻となった⁴¹⁾。このようなスラヴ有力家門の子女との婚姻関係はデンマーク・イエリング朝にとどまらず、新都シグトゥーナを拠点としたスヴェア王エーリク勝利王の妻はポーランド公の姉妹(彼女はエーリクの死後にスヴェン叉髭王の妻となる!)であり⁴²⁾、両者の息子ウーロヴ・シェットコーヌングによるオボドリート侯家の娘エストリズとの結婚も確認される⁴³⁾。紀元千年前後におけるスカンディナヴィアの王家とスラヴ地域の有力家門との数世代にわたる緊密な婚姻関係は、スカンディナヴィアの王権が対岸のスラヴ勢力を継続的に重視していたことの証左であり、12世紀以降両王家の婚姻対象が西ヨーロッパもしくはルーシ国家の子女を対象とするようになることを考えれば、12世紀の境目においてそれ以前と政治構造が転換していることを意味していると考えられるべきであろう⁴⁴⁾。それはプロムクヴィストの提起する「カトリック世界システム」への移行期と重なる時期であることにも注意しなければならない。

婚姻関係により磨き上げられたバルト海沿岸部の有力諸侯間の関係は、政治的な亡命も可能とする。987年ハーラル青歯王は、息子スヴェンと彼と結ん

だ在地有力者の反乱によりデンマーク王位を追われるが、その逃走先はスラヴの地にあるユムネと呼ばれる人口集住地（おそらくオーダー河口に位置するヴォリン）であった⁴⁵⁾。他方、クヌートの宮廷にもスラヴ人有力者の痕跡を認めることができる。1026年、すでにイングランド王位を獲得していたクヌートが司教リフィングにハンティンドンシャのアボッツ・ウォージの土地を付与したことを確認する国王証書の署名欄には、「公 dux」という肩書きを持つブラチスラフという人物が記録されている。他の史料では確認できないこの人物は、その肩書きから何らかの理由で一時的にクヌートの宮廷に滞在したスラヴ系の有力者であると考えられ⁴⁶⁾、また、先に述べたオボドリート侯ゴットシャルクは、ザクセン公ベルンヴェルトとの戦いに敗北した後、クヌートとともにイングランドへ渡り一定期間クヌートの宮廷に身を寄せていた、と伝えられる⁴⁷⁾。亡命という行為は、それが実行されるより以前から、両者の間にある種の信頼関係もしくは利害関係が存在していたために可能な政治行動であることを考えるならば、以上述べた事例は史料上では直接確認し得ない関係が前もってデンマークとスラヴ諸侯との間に結ばれていたことを推測させる。

筆者が旧稿で指摘したように、紀元千年前後のバルト海政治においてはさまざまな政治体が短期間で合従連衡を繰り返すため、以上述べてきた婚姻関係が恒久的な家門間の連携を保証するわけではない⁴⁸⁾。しかしながら、少なくともこれまで考えられている以上に、スカンディナヴィア諸国とスラヴ諸国との間には深い政治上の結びつきがあり、それは国家形成期にあった両者が互いを意識するに足る存在と看做していたからであると考えべきであろう。それではこのように措定された両者の政治上の関係を復元するためにわれわれはどのような手法を用いるべきであろうか。紀元千年前後の北歐と東欧は、ルーン石碑という例外を除いて、いずれも自らによって表現された同時代史料をほとんど持たないという史料上の制約を抱えている。それゆえ、結局のところドイツその他のラテン・キリスト教世界で記録された史料に散発的に現れる「名ある人びと」のデータを網羅的に収集するプロソポグラフィの手法によ

てしか、効果的な成果を期待できないのではないかと思われる。ただ、その際に注目すべきは王侯諸頭の妻や娘の動向であり、彼女たちがいつ誰のもとに嫁ぎ、嫁ぎ先でどのような役割を果たしていたのかを問うことによって、地域間関係史を重層的に理解することが可能となるだろう⁴⁹⁾。スカンディナヴィア史の領域では、実際にこうした女性有力者の役割を積極的に評価する研究も徐々に現れており、政治史の中にジェンダーという視点を持ち込むことの有効性も実証されるようになってきている⁵⁰⁾。

12世紀以降の関係ばかりが論じられがちであるスカンディナヴィアとバルト海南岸の関係であるが、それ以前の時期においても両地域は独特の政治圏域を確立しており、われわれはその構造の生成と変容を見逃してはならない。もちろんスカンディナヴィア世界南部とバルト海南岸部によって構築される政治圏域の背後には、帝国としての姿形を整えつつあったドイツが控えており、この存在を無視することはできない⁵¹⁾。紀元千年前後にオットー朝ドイツとピアスト朝ポーランドが築き上げた緊密な政治上の関係と動向は⁵²⁾、エルベ・スラヴ人やスカンディナヴィア人による国家群にとっても決定的な意味を持っており、北歐の歴史学においても本来はドイツとの関係が対外関係史の中心を占めていた⁵³⁾。もちろんこのような政治構造は、紀元千年前後にスカンディナヴィアや東方世界へ拡大しつつあった司教座や都市ネットワークにより改編する経済構造と緊密に関係していることは言うまでもない⁵⁴⁾。どのような視角に立つのであれ、諸側面の相互作用は念頭に置くべきであろう。

当該地域の歴史研究においては、現在の国境線や海洋を他者との接触を撥ねつける障壁と捉える思考を捨てると同時に、ポーランドとドイツ、デンマークとオボドリートといった二者関係ではなく、それを取り巻く複数の演者を構成要素として捉え、歴史像を再構成していく必要があるだろう。

1) F. Lotter, The crusading idea and the conquest of the region east of the Elbe, in R. Bartlett & A. Mackay (eds), *Medieval Frontier Societies*, Oxford 1989, pp. 267-306, 特に, pp. 285-294.

- 2) このような視点で中世デンマーク史を捉えなおしたのは、T. Riis, *Das mittelalterliche dänische Ostseeimperium* (Studien zur Geschichte des Ostseeraumes IV), Odense 2003.
- 3) E. Christiansen, *The Northern Crusades*, New ed., London 1997 (1st ed., 1980); スカンディナヴィア人のパレスチナへの十字軍参加に関しては19世紀に古典的な研究がある。P. Riant, *Skandinavernes Korstog og Andagtsreiser til Palastina (1000-1350)*, Kjøbenhavn 1868.
- 4) 興味深いことに、デンマークで十字軍研究に資金が投入されていたのとはほぼ同時期、スウェーデンとノルウェーでは国内のキリスト教化に関するプロジェクトが国家による重点研究対象に指定されていた。スウェーデンのプロジェクトに関して、B. Nilsson (red.), *Kristnandet i Sverige. Gamla kallar och nya perspektiv*, Uppsala 1996, s. 11-16.
- 5) すべてをあげることはできないがたとえば、Krig, korstog og kolonisering (*Den jyske Historiker* 89), Århus 2000; K. Villads Jensen, The blue Baltic border of Denmark in the Middle Ages: Danes, Wends and Saxo Grammaticus, in D. Abulafia & N. Berend (eds), *Medieval Frontiers: Concepts and Practices*, Aldershot 2002, pp. 173-193.
- 6) J. Lind et al., *Danske korstog. Krig og mission i Ostersoen*, København 2004.
- 7) A. V. Murray (ed.), *Crusade and Conversion on the Baltic Frontier 1150-1500*, Aldershot 2001. なおバルト海十字軍に関しては、近年スウェーデン中世史家による包括的な概説が出版された。D. Harrison, *Gud vill det! Nordiska korsfarare under medeltiden*, Stockholm 2005.
- 8) ヨーロッパ大陸における改宗活動という長期的な視点に立つならば、そのクロノロジーはさらに前の時代へと広がる。このような視点の研究は「宣教史」という教会史の一分野をなし、その成果も無数にあるが、歴史的に極めて豊かな内容を持ち、その最終章をスカンディナヴィア世界の改宗にあてる研究として、P. Brown, *The Rise of Western Christendom. Triumph and Diversity, A.D. 200-1000*, 2nd ed., Oxford 2003, pp. 463-488.
- 9) M. Müller-Wille (Hrsg.), *Rom und Byzanz im Norden. Mission und Glaubenswechsel im Ostseeraum während des 8.-14. Jahrhunderts*, 2 Bde., Stuttgart 1997-98.
- 10) 近年のハンザ研究に関してはさしあたり、P. Dollinger & A. Graßmann, *Zur hansischen Gesellschaftsforschung 1960-1997*, in P. Dollinger, *Die Hanse*. 5., erweiterte Aufl., Stuttgart 1998, S. 487-508.
- 11) N. Blomkvist (ed.), *Culture Clash or Compromise? The Europeanisation of the Baltic Sea Area 1100-1400 AD*, Visby 1998.
- 12) N. Blomkvist & S.-O. Lindquist (eds), *Europeans or Not? Local Level Strategies on the Baltic Rim 1100-1400 AD*, Visby 1999; J. Staecker (ed.), *The European Frontier: Clashes and Compromises in the Middle Ages*, Lund 2004; D. Kattinger et al. (Hrsg.), *Der Ostseeraum und Kontinentaleuropa 1100-1600. Einflußnahme - Rezeption - Wandel*, Schwerin 2004.
- 13) N. Blomkvist, *The Discovery of the Baltic: The Reception of a Catholic World-System in the European North (AD 1075-1225)*, Leiden 2005, pp. 567-678. 理論的には、id., The medieval Catholic world-system and the making of Europe, in J. Staecker (ed.), *ibid.*, pp. 15-33.
- 14) J・アブー・ルゴド (佐藤次高ほか訳) 『ヨーロッパ覇権以前 もうひとつの世界システム』2巻 (岩波書店, 2001)。
- 15) J. C. H. R. Steenstrup, *Venderne og de Danske før Valdemar den Stores Tid*, Kjøbenhavn 1900.
- 16) 依然としてスカンディナヴィア世界と東スラヴ世界、つまりルーシとの関係は重要であり、角谷英則『ヴァイキング時代』(京都大学学術出版会, 2006)の第2章「移動の時代」では両者の関係をめぐって興味深い議論が紹介されている。
- 17) 遺物のカタログとして、J. Herrmann & P. Donat, *Corpus archäologischer Quellen zur Frühgeschichte auf dem Gebiet der Deutschen Demokratischen Republik (7. bis 12. Jahrhundert)*, Berlin 1973-85; J. Zak, *Imparty skandynawskie na ziemiach zachodnioslowianskich od IX do XI wieku*, 3 vols, Poznań 1963-67.
- 18) K. Düwel et al. (Hrsg.), *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordeuropa*, Teil IV: *Der Handel der Karolinger- und Wikingerzeit*, Göttingen 1987; *Oldenburg - Wolin - Staraja Ladoga - Novgorod - Kiev. Handel und Handelsverbindungen im südlichen und östlichen Ostseeraum während des frühen Mittelalters* (Bericht der Römisch-Germanischen Kommission 69), Mainz

- 1988.
- 19) 市原宏一『中世前期北西スラヴ人の定住と社会』(九州大学出版会, 2005)。また、本書の考察と深くつながる、市原「外来と土着—考古学資料を基にしたバルト海南岸地域史研究の課題—」藤井美男・田北廣道編著『ヨーロッパ中世世界の動態像—史料と理論の対話』(九州大学出版会, 2004), 313-345頁も参照。
- 20) H. Ludat (Hrsg.), *Siedlung und Verfassung der Slawen zwischen Elbe, Saale und Oder*, Giesesen 1960; H. Ludat, *An Elbe und Oder um das Jahr 1000. Skizzen zur Politik des Ottonenreiches und der slavischen Mächte in Mitteleuropa*, 2. Aufl., Weimar 1995.
- 21) C. Lübke, *Regesten zur Geschichte der Slaven an Elbe und Oder*, 5 Bde., Berlin 1984-88.
- 22) 考古学者の手になる記念碑的なハンドブックとして、J. Herrmann (Hrsg.), *Die Slawen in Deutschland. Geschichte und Kultur der slawischen Stämme westlich von Oder und Neiße vom 6. bis 12. Jahrhundert*, Berlin 1985.
- 23) 市原『中世前期』, 147頁。
- 24) たとえば、R. Kelm, *Mölleholmen. Eine slawische Inselsiedlung des 11. Jahrhunderts in Schonen, Südschweden*, Lund 2000.
- 25) M. Roslund, *Gäster i Huset. Kulturell överföring mellan slaver och skandinaver 900 till 1300*, Lund 2001.
- 26) ただし包括的とはいっても、取り扱う対象は原則としてスカンディナヴィア半島南部(中世においてはデンマーク領)からウップランド近郊まで、つまり現在のスウェーデン領に限定されており、ユラン半島やノルウェーが含まれているわけではない。
- 27) 「スラヴ」というエスニシティ概念のもつ問題性は、F. Curta, *From Kossina to Bromley: Ethnogenesis in Slavic archaeology*, in A. Gillet (ed.), *On Barbarian Identity: Critical Approaches to Ethnicity in the Early Middle Ages*, Turnhout 2001, pp. 201-218.
- 28) O. Harck & C. Lübke (Hrsg.), *Zwischen Reric und Bornhöved. Die Beziehungen zwischen den Dänen und ihren slawischen Nachbarn vom 9. bis ins 13. Jahrhundert*, Stuttgart 2001.
- 29) 2000年より、これら島嶼部の自治体や博物館が「友にして敵—ヴァイキング時代と初期中世におけるデンマーク・ヴェンド関係—」というプロジェクトを立ち上げた。オーデンセ大学等で学術シンポジウムも開催されたようである。プロジェクトの梗概は、次のサイトで確認できる (<http://www.aabne-samlinger.dk/venderprojekt/index.htm>)。
- 30) 「島嶼にして境域」の地政学的な意味合いを論じるのは、B. E. Crawford, *The Vikings*, in W. Davies (ed.), *From the Vikings to the Normans* (Short Oxford History of The British Isles), Oxford 2003, pp. 40-71.
- 31) S. Ellehøj, *Olav Tryggvesons fald og Venderne*, *Historisk Tidsskrift* 11 r. 4 (1953-56), s. 1-55.
- 32) T. Damgaard-Sørensen, *Danes and Wends: A study of the Danish attitude towards the Wends*, in I. Wood & N. Lund (eds), *People and Places in Northern Europe 500-1600: Essays in honour of Peter H. Sawyer*, Woodbridge 1991, pp. 171-186.
- 33) N. Lund, *Harald Blåtands død og hans begravelse i Roskilde?*, Roskilde 1998. 1983年にはP・グリナー・ハンセンが『デンマークにおけるヴェンド人』という修士論文をコペンハーゲン大学に提出しているが、未公開であるため内容の詳細はわからない。P. Grindler-Hansen, *Venderne i Danmark. En diskussion af forskning og kilder om venderne i Danmark indtil c. 1200*, Hovedfagsspeciale i historie, Københavns universitet 1983.
- 34) W. Duczko, *Continuity and transformation: the tenth century AD in Sweden*, in P. Urbanczyk (ed.), *The Neighbours of Poland in the 10th Century*, Warszawa 2000, pp. 7-36; id., *A. D. 1000 - the point of no return for the kingdom of Sweden*, in P. Urbanczyk (ed.), *Europe around the year 1000*, Warszawa 2001, pp. 367-378; id., *The fateful hundred years: Sweden in the eleventh century*, in P. Urbanczyk (ed.), *The Neighbours of Poland in the 11th Century*, Warszawa 2002, pp. 11-27.
- 35) 近年、彼はスカンディナヴィア人と東スラヴ人との関係を論じたモノグラフを刊行したが、バルト海南岸部を対象とするものではない。W. Duczko, *Viking Rus: Studies on the Presence of Scandinavians in Eastern Europe*, Leiden 2004.
- 36) G. Labuda, *Slavs in early medieval Pomerania and their relations with Scandinavians in the 9th and 10th centuries*, in *Poland at the 11th International Congress of Historical Sciences in Stockholm*, Warszawa 1960, pp. 61-80.

- 37) たとえば, J. Strzelczyk, *Bohemia and Poland*, in T. Reuter (ed.), *The New Cambridge Medieval History III, c.900-c.1024*, Cambridge 1999, pp. 514-535.
- 38) 東欧世界における異邦人の存在を扱った研究として, C. Lübke, *Fremde im östlichen Europa. Von Gesellschaften ohne Staat zu verstaatlichten Gesellschaften (9.-11. Jahrhundert)*, Köln 2001. 本書ではスカンディナヴィア人の事例も扱われるが, 散発的である。
- 39) E. Moltke & L. Jacobsen, *Danmarks Runeindskrifter*, København 1941-42, col. 93-95 (No.55) .
- 40) Adam von Bremen, *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, in W. Trillmich (Hrsg.), *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der Hamburgischen Kirche und des Reiches*, Darmstadt 1961, II-39, S. 274.
- 41) Adam, *Gesta...*, III-19, S. 350.
- 42) Adam, *Gesta...*, II-35, S. 270 (P. Schol. 24).
- 43) Adam, *Gesta...*, II-39, S. 274.
- 44) デンマーク王権による婚姻政策の転換に示唆を与える研究として, J. Lind, *De russiske akteskaber. Dynasti og alliancepolitik i 1130'ernes danske borgerkrig*, *Historisk Tidsskrift* 92 (1992), s. 225-63; 12世紀以降のデンマークとスラヴ世界との政治的關係については, 近年 L. ヘルマンソンによる研究が目を引く。L. Hermanson, *Danish lords and Slavonic rulers: The elite's political culture in early twelfth century Baltic*, in J. Staecker (ed.), *ibid.*, pp. 97-113; *id.*, *Saxo and the Baltic. Danish Baltic-sea policies at the end of King Niels' reign 1128-1134*, in T. Nyberg (ed.), *Saxo and the Baltic Region: A Symposium.*, Odense 2004, pp. 105-113.
- 45) Adam, *Gesta...*, II-27, S. 262.
- 46) P. H. Sawyer, *Anglo-Saxon Charters: An annotated list and bibliography*. London 1968, p. 289 (N 962); S. Keynes, *Cnut's earls*, in A. Rumble (ed.), *The Reign of Cnut. King of England, Denmark and Norway*, London 1994, pp. 64-65.
- 47) Adam, *Gesta...*, II-66, S. 306.; ゴットシャルクという興味深い人物に関しては掘り下げた研究が必要であるが, さしあたり, B. Friedmann, *Untersuchungen zur Geschichte des abodritischen Fürstentums bis zum Ende des 10. Jahrhunderts*, Berlin 1986, S. 274-77.
- 48) 小澤実「エーリク勝利王と紀元千年直前のバルト海世界」『史学雑誌』113-7 (2004), 1-36頁。
- 49) 初期中世史におけるジェンダー研究の一例として, L. M. Bitel, *Women in Early Medieval Europe 400-1100*, Cambridge 2002; L. Brubaker (ed.), *Gender in the Early Medieval West: East and West, 300-900*, Cambridge 2004.
- 50) ルーン石碑のデータに基づいた先駆的な研究として, J. Jesch, *Women in the Viking Age*, Woodbridge 1991. ゴーム老王による国家形成における王妃チューラの重要性を強調する論考として, B. Sawyer & P. H. Sawyer, *A Gormless history? The Jelling dynasty revisited*, *Runica - Germanica - Mediaevalia* (RGAE 37), Berlin - New York 2003, S. 689-706. ただし筆者はソーヤー夫妻の説に全面的に賛成はしない。小澤実「ゴームの足跡を求めて—ヒストリオグラフィと文字資料の中のゴーム老王—」『北歐史研究』21 (2004), 1-19頁。
- 51) この三者の関係を教会史の観点から祖述したのが, J. Petersohn, *Der südliche Ostseeraum im kirchlich-politischen Kräftespiel des Reichs, Polens und Dänemarks vom 10. bis 13. Jahrhundert. Mission - Kirchenorganisation - Kultpolitik*, Köln 1979. ただし10世紀と11世紀に割かれた頁はごくわずかであり, そこにデンマークの姿はほとんど見えない。
- 52) 紀元千年前後におけるドイツ・ポーランド関係の研究はドイツとポーランド両国において相当の蓄積があるが, 注51であげた J・ペーターゾーンの研究に触発された「聖性構造」という独特の視点から, 紀元千年期という個性化された意味空間の中で両者の関係を捉え返した興味深い研究として, 千葉敏之『複製された神聖王権—国家形成期ポーランドとオットー朝ドイツ—』(東京大学人文社会系研究科課程博士論文, 2004)。
- 53) S. Bolin, *Danmark och Tyskland under Harald Gormsson. Grundlinjer i dansk historia under 900-talet*, *Scandia* 4 (1931), s. 184-209.
- 54) 政治史的側面と教会史的側面を考慮した研究として, E. Hoffmann, *Beiträge zur Geschichte der Beziehungen zwischen dem Deutschen und dem Dänischen Reich für die Zeit von 934 bis 1035*, in C. Radtke & W. Körber (Hrsg.), *850 Jahre St.-Petri-Dom zu Schleswig, 1134-1984*. Schleswig 1984, S. 97-132.

* 本稿は, 2005年度松下国際財団研究助成と東京大学21世紀 COE「死生学の構築」若手研究者支援研究費による成果の一部である。